

## コミュニケーション論講義（２）

### An Introduction to the Study of Communication (2)

岩 本 一 善

（第51号より続き）

#### 2-1. 言語と伝達、思考、自意識（補足：パースによる「言語なき思考」の否定）

言語の中心的役割は「自意識（self-consciousness）」の生成とそれに伴う「思考」、そして「伝達（communication）」である。言語を獲得してしまうことで生じる「自意識」についてはすでに簡単に触れておいた。だがここでもう一度、言語と「思考」、「自意識」、「伝達」の問題について確認しておきたい。

一度ある言語が一定の臨界点を越えて母言語として獲得されてしまえば、それはあたかも生得的な器官であったかのように自己と一体化してしまうと述べた。そうなればわれわれは、その言語で反射的に感じ、思考するようになる。

では言語によらない思考は可能であろうか。可能である、と考えた方が妥当なようである。なぜなら、言語を持たない生物や、未だ言語を習得するに至っていない乳幼児もまた、確かにそれなりに合理的な推論を行なっているようにみえるからだ。では、すでに言語を獲得してしまった人間にもそれは可能なのだろうか。そのような問いはまた、言語による思考の過程がまったく介入しない「直感（intuition）」というものが存在するのか、という問いに置き換えることができるだろう。そしてこの問題はすでに、1868年に *Journal of Speculative Philosophy* に掲載されたパース（Pierce, C. S.）による二つの論文、「人間に内在するとされているある能力に関する疑義（Questions Concerning Certain Faculties Claimed for Man.）」<sup>(1)</sup>、「4つの能力の欠如から導きだされる諸結論（Some Consequence of Four Incapacities.）」<sup>(2)</sup>において検討されている。以下では、主に前者の論文によってパースの述べたことを概観していくこととする<sup>(3)</sup>。

前者の論文は、7つの疑問を提示し、それらをひとつひとつ検証していくというスタイルで構成されている。そこでわれわれも、この7つの疑問に対するパースの答えをたどっていくことにする。

まず第1の疑問、「私たちには、いかなる以前の過去の知識にも、また記号による推論にもよることなく、ある認識に対する純粋な思索によって、認識されたものが過去の認識から判断されたものなのか、あるいはそれが認識対象と直接的に結びついているものなのかを、正しく

判断することができるのか? (QUESTION 1. *Whether by the simple contemplation of a cognition, independently of any previous knowledge and without reasoning from signs, we are enabled rightly to judge whether that cognition has been determined by a previous cognition or whether it refers immediately to its object.*)」<sup>(4)</sup>という問いである。パースの言う「直感」とは、同じ対象から過去に認識されたもの、つまり意識の外部にある何物からかによる規定を受けない認識 (cognition) の謂い、とのことである。そしてそれは、「(推論による) 結論から導き出されたものではない前提 (premises not itself a conclusion)」とほぼ同義であるとされる。また前提と結論との唯一の差異は、それが「判断 (judgment)」により導き出されたものであるか否かにある一方で、「直感」とは、それがどのようなものであるにせよ、それ自体が何らかの認識であるものであるはずだ、とされる。しかしここで、結論が推論者の内面で前提から導き出されるものであるのと同様に、「判断」のプロセスを経ない結論とは、推論者の過去に経験した認識から導き出されるものでなければならない、とされる。この要件を充たすためには、「直感」とは、そのような判断のプロセスを経ずに、つまり先験的に対象から何の媒介も経ることなく規定されるものであるはずだ、というのがパースの定義する「直感」である。

そのうえで、

ある直感を得るということと、それが直感であることを直感的に知るということは明らかに別種の事柄であって、問題は、それらが思考の中で弁別可能な一定不変性を保ったまま併置されているのか否か、いるとするならば、それによって私たちには「直感」と「認識」との違いを直感的に、例外なく識別することが可能であるのか。(Now, it is plainly one thing to have an intuition and another to know intuitively that it is an intuition, and that question is whether these two things, distinguishable in thought, are, in fact, invariably connected, so that we can always intuitively distinguish between an intuition and a cognition determined by another.)<sup>(5)</sup>

という点にある、とされる。これに対するパースの答えは、そのような能力を私たちが持っていることの根拠は、私たちがそのように「感じる (to feel)」ということを除いては存在しない、というものである。網膜上に存在する盲点によって、私たちがそれ自体として直接知覚する視覚には構造上の欠落がある。しかし私たちはそれを思考 (the intellect) の働きによって補っている。また私たちが布地の表面に指をすべらせてその手触りを識別することが可能なのは、即時的＝直接的にではなく、それらの即時的な感覚を時系列に沿って比較することによってである。同様に、ある音のピッチは、短い周期で連続する空気の振動が聴覚によって認識されることで決定される。このように、ある認識はそれに先行する認識との対比によって理解可能なものとなるのである。なぜなら、

一連の時間は、それ自体として即時的に知覚することが不可能であるからだ。それが可能なのであるとすると、それぞれの瞬間に固有の感覚が存在するのでなければならない。しかしそのような瞬間とは持続＝継続ではないし、また持続＝継続にも即時的な感覚などというものはあり得ない。したがって、それぞれの瞬間に固有の知覚も、即時的な持続＝継続の感覚ではあり得ない。同様に、それぞれの瞬間に固有の知覚の総体も持続＝継続の感覚ではあり得ない。それに対して、ある長さを持った時間の感触とは非常に複雑な混合物であり、あらゆる感覚と記憶との観念（または観念の構成要素）がそこには含まれる。そしてその複雑さは、持続＝継続する時間という概念によってのみ単純化できるものである。(That the course of time should be immediately felt is obviously impossible. For, in that case, there must be an element of this feeling at each instant. But in an instant there is no duration and hence no immediate feeling of duration. Hence, no one of these elementary feelings is an immediate feeling of duration; and hence the sum of all is not. On the other hand, the impressions of any moment are very complicated - containing all the images (or the elements of the images) of sense and memory, which complexity is reducible to mediate simplicity by means of the conception of time.)<sup>(6)</sup>

からだ。したがって私たちには、「直感」と認識によって伝えられたものとを識別可能であるような直感的能力が具わっているとは考えられない、というのが第一の疑問に対するパースの答えである。

続いて第2の問い、「私たちは、直感的に認識可能であるような自意識を持っているのか (QUESTION 2. *Whether we have an intuitive self-consciousness.*)」<sup>(7)</sup> について。ここでパースが言う「自意識」とは、自分自身という私的な自己が存在していることについての理解、とのことである。それは、一般的な意識、つまり表象された認識の対象が意識化されていることとは区別される。またそれは「内覚 (internal sense)」、つまり主体が何らかの意識を持っている状態を感じているということとも、純然たる「統覚 (apperception)」、つまり主体が「自我 (The Ego)」を無根拠に確信していることとも異なるものであるとされる。

問題は、そのような「自意識」を私たちがどのようにして知るのか、という点にある。それはある特殊な直感的能力によるのか、あるいは「自意識」に先立つ認識によってなのか。パースによれば、「自意識」と「自我」とは、前者が後者とは異なり、「知らない」ということを自覚することが可能であり、また誤りをおかすことが可能であることにあるのだ、とされる。たとえば小さな子どもがこの「自意識」を獲得するに至るのは、「自我」の世界観を外の世界にも敷衍することで経験する誤り、「自我」と外部環境との齟齬が「自我」の無知に由来するものであることを自覚することによるだろう。「自我」のエラーは、主体と外部環境との相互作用によっても自覚されるが、一般的には、自分とはまた別の「自我」を持った他者とのコミュ

ニケーションにより自覚されるのではないか。そのような経験を通じて子どもは、自身の内に私的な領域があることを知り、「自意識」を芽生えさせていく。そうであるとするならば、パースによれば、「直感的に認識可能な自意識」の存在可能性についての論拠は、以下の推論を検討するだけで十分である。それは、「私たちは、私たち自身が存在しているということを他のどんな事実にも増して確信している。ある前提が結論を導き出すのに、前提それ自体が結論であるということ以上に確かなものはないから、私たち自身が存在しているということが、それ以外の事実から推定されるというようなことはあり得ない（We are more certain of our own existence than of any other fact; a premise cannot determine a conclusion to be more certain than it is itself; hence our own existence cannot have been inferred from any other fact.）」<sup>(8)</sup> というものである。このとき、「前提それ自体が結論であるということ以上に確かなものはない」ということは妥当であるが、「私たち自身が存在しているということが、それ以外の事実から推定されるというようなことはあり得ない」というのは論理の破綻である。したがってパースは、「直感的に認識可能な自意識」などというものを措定する必要はない、なぜなら「自意識」は推論の結果として導き出されるものだからだ、と結論づける。

第３の疑問は、「私たちには、様々な認識から織り成される主観的構成要素を、直感的に弁別できるような能力が具わっているのか（QUESTION 3. *Whether we have an intuitive power of distinguishing between the subjective elements of different kinds of cognitions.*）」<sup>(9)</sup> というものである。一見すると、私たちがそのような能力を持っていることに疑いの余地はないように思える。ある色を見ることと、その色を想像することとの間には大きな違いがあるし、それがどんなに生き活きとしたものであっても、夢と現実との違いは明白である。しかしパースによれば、そのような能力の存在を私たちが直感的に知ることは不可能なのだ。私たちには、直感による認識を、それが直感によるものであると知ることができないからだ。問題は、そのような能力の存在を想定しなければ、私たちが主観的な構成要素を弁別可能であることの合理的な説明が成り立たないのか否か、という点にある。それに対するパースの答えは否であり、対象が直接的に認識された場合と、それを心の内で想像した場合とでは大きな違いがあるということ自体が、直感的な能力を想定しなくても、私たちには様々な認識からなる主観的な構成要素を弁別可能であることの十分な説明となっている、とする。その根拠は以下の通りである。

私たちには、ある信念と、それとはまた別のある観念とを、多くの場合それらの信念や観念に固有のある確信感によって、疑いの余地なく弁別することが可能である。そして私たちが信念を、そのような確信感に伴われた判断であると定義するのか、あるいはまたそれを、自らの行為によって導き出された判断であるとするのかは、単に言葉の選択の問題にすぎない。便宜的に、前者を感覚的な信念（sensational belief）、後者を能動的な信念（active belief）と呼ぶことができる。両者のいずれもが、必ずしも他方の信念を要件とす

るものではないということは、事実をあげて詳細な説明をするまでもなく認められるであろう。感覚的信念を持つこと、つまり直感的にそれを統合する能力とは、単に判断を伴った感覚の能力と結論づけることができる。またこのような感覚は、それ以外の感覚と同様、意識の対象のひとつであるから、その能力は、意識の主體的な構成要素を直感的に理解する能力を含意するものとはならない。信念が自らの行為によって得られたものであった場合は、意識の外部にある事実を観察することによって、そして通例そのような信念に付随する確信感から導き出される結論によって、その存在を知ることができるはずである。

(Now, we can unquestionably distinguish a belief from a conception, in most cases, by means of a peculiar feeling of conviction; and it is a mere question of words whether we define belief as that judgment which is accompanied by this feeling, or as that judgment from which a man will act. We may conveniently call the former *sensational*, the latter *active*, belief. That neither of these necessarily involves the other, will surely be admitted without any recital of facts. Taking belief in the sensational sense, the intuitive power of reorganizing it will amount simply to the capacity for the sensation which accompanies the judgment. This sensation, like any other, is an object of consciousness; and therefore the capacity for it implies no intuitive recognition of subjective elements of consciousness. If belief is taken in the active sense, it may be discovered by the observation of external facts and by inference from the sensation of conviction which usually accompanies it.)<sup>(10)</sup>

こうして、意識のうちにそのような特殊な能力、つまり様々な認識から織り成される主観的構成要素を直感的に弁別する能力を前提としなければならないような推論は消滅してしまう、とされるのだ。

第4の疑問、「私たちには、自己の内面を省みるある種の能力が具わっているのか、それとも私たちの内面はすべて、意識の外部に存在する事実を観察することによって引き出されてきたものであるのか (QUESTION 4. *Whether we have any power of introspection, or whether our whole knowledge of the internal world is derived from the observation of external facts.*)」<sup>(11)</sup>について。少なくともこの疑問を掲げた時点では、パースが意識の外部に存在する世界の实在それ自体を所与の前提としているというわけではない。ここでのパースの意図はただ、一方には一般的には外的なものと判断され、他方には内的なものと判断される諸事実の集合がある、という点の確認だけである。問題は、後者を、前者をもとにした推論をおこなうという以外の方法から知ることができるのか、ということにある。ここでパースが「内面を省みる能力 (introspection)」という言葉で指し示しているのは、内的な世界を直接的に知覚することであるが、それは必ずしも内的な世界をそのようなものとして知覚するということではない、とされる。またこの言葉は、直感力の同義語として限定されるのではなく、外的な世界を観察することに



よって導き出されるもの以外の、内的な世界に関するあらゆる知識という意味にまで拡張して使われるのだ、とされる。

あらゆる知覚には内的な対象が存在するというのは、すべての感覚は部分的には内的な条件に規定されるということからすれば、ある意味では正しい。たとえば赤い色を知覚するということは、「赤い色」をそのようなものとして受け取る心的な構造によるものだから、それはある意味で内的なものであると言える。しかし私たちが持っている「赤い色」に関する知識それ自体は、明らかにそのような属性を持った外部に存在する何かから導き出されてきたものである。一方で、「感情＝情緒（emotion）」のような感覚は、何物かの属性としてではなく、それ自体として知覚されるのではないか、したがって「感情＝情緒」は専ら内面にのみ帰することができると言えるのではないかと考えることもできる。しかし本当にそうなのだろうか。パースの考えは、ここでもノーである。

たとえばある人が怒っているという場合、確かに彼の「怒り」の感情には一定に確定された対象が存在しないということは認められるかもしれない。それでも、彼の外部の世界に、彼を怒りの感情に駆り立てた何物かが存在しているはずであるということには疑問の余地はないだろう。そして彼の怒り、彼の「私は怒っている」という感情は、彼が彼自身に対して、たとえば「これは下劣で卑しむべきものである」と語りかけているということに帰せられるのだ、とされる。こうして、あらゆる「感情＝情緒」は何らかの対象の属性であり、「感情＝情緒」と客観的な知的判断との大きな違いは、後者が人間共通の特性や精神一般に関連するものであるのに対して、前者が、ある特定の時間における、ある特定の人間の状況や気質に関連するものだというところにある、とされる。したがって、「内面を省みる能力（introspection）」を想定しなければならない根拠はないし、心理学的な疑問を研究する唯一の手段とは、外的な諸事実をもとに推論する以外にないのだ、とされる。

第５の疑問、「私たちは、記号によらない思考というものが可能だろうか（QUESTION 5. *Whether we can think without signs.*）」<sup>(12)</sup>はどうであろうか。この非常に一般的な疑問に対して、パースは次のように答える。

私たちが外的な諸事実を理解しようとするとき、私たちにとって唯一見出すことができる思考とは、記号化された思考のみであり、外的な諸事実がそれ以外の思考によって明示されることがないのは明らかである。しかし、外的な諸事実によってのみ私たちには思考が理解可能なものとなることは既に見てきた。そして、私たちになんとか認識可能であるような思考とは、記号化された思考のみなのである。認識できない思考は存在しない思考である。したがって、すべての思考は必然的に記号化された思考となる。（If we seek the light of external facts, the only cases of thought which we can find are of thought in signs. Plainly, no other thought can be evidenced by external facts. But we have seen that only by

external facts can thought be known at all. The only thought, then, which can possibly be cognized is thought in signs. But thought which cannot be cognized does not exist. All thought, therefore, must necessarily be in signs.)<sup>(13)</sup>

そしてさらに、

すべての思考は記号であるという命題から、すべての思考はそれ自体とは異なる何物かとして思考を取り扱わなければならない、またそれ自体とは異なる何物かを確定するのだからである。そしてそれは結局、「直感」、すなわち即時的＝直接的な現在に思考は存在せず、すべての思考にはそれをもたらした過去があるのだという、もう一つの一般的な公理を言い換えたものにすぎない。此処ヨリ言葉アリ。この言葉は、なんらかの思考が存在し得たということはそこに思考があったということであり、なんらかの過去の時間が存在し得たということはそこに無限につながる一連の時間が存在していたという事実と類されるものである。したがって、思考はある瞬間には生じ得ないものであり、必ずある時間を必要とするのだと主張することとは、すべての思考とはそれ自体とは別のものから解釈されたものである、言い換えればすべての思考は記号の内に存在するものである述べることと同様なのである。(From the proposition that every thought is a sign, it follows that every thought must address itself to some other, must determine some other, since that is the essence of a sign. This, after all, is but another form of the familiar axiom, that in intuition, i.e., in the immediate present, there is no thought, or, that all which is reflected upon has past. *Hinc loquor inde est*. That, since any thought, there must have been a thought, has its analogue in the fact that, since any past time, there must have been an infinite series of times. To say, therefore, that thought cannot happen in an instant, but requires a time, is but another way of saying that every thought must be interpreted in another, or that all thought is in sign.)<sup>(14)</sup>

とされる。

ここでのパースの答えは、以上のようにとても簡潔でアファーマティヴなものである。思考するということが可能であるためにはその対象が必要となる。しかし、対象それ自体という直接的＝即時的な「直感」は思考の対象にはなり得ないし、私たちの認識の内にはそのようなものは存在しないであろう。仮に存在し得たとしても、私たちにはそのような「直感」をそれ以外の認識の構成要素から弁別することができない、というのがパースの考えである。言葉を換えれば、私たちが思考しているという歴然とした事実がある以上、その対象はそれ自体という

直接的＝即時的な「直感」ではなく、対象を指し示しているが対象それ自体とは異なる何物かである、つまりそれは記号なのである、ということだ。そしてまた、記号がそれ自体とは異なる何物かを指し示していることは、そこにそのような過程を生じさせた時間というものがあるはずである、ということになる。

この第５の疑問にこのように答えることで、実はパースは既に第６、第７の疑問にも答えてしまっていることになるのである。第６の疑問とは、「記号というものが、その定義上あらゆる意味を持ち得るものなのだとしたら、私たちにはまったく認識できないものを指し示している記号というものも存在し得るのだろうか（QUESTION 6. *Whether a sign can have any meaning, if by its definition it is the sign of something absolutely incognizable.*）」<sup>(15)</sup> というものである。また最後の第７の疑問とは、「それ自体に先立つ認識による既定を受けない認識というものが存在可能であるのか（QUESTION 7. *Whether there is any cognition not determined by a previous cognition.*）」<sup>(16)</sup> というものであった。特に第７の疑問については、これまでも第１の疑問を検討する際に、認識とは時間的にそれに先行する認識との対比によって初めて理解可能なものとなるものであることが確認されていたし、ここでも「即時的＝直接的な現在に思考は存在せず、すべての思考にはそれをもたらしした過去があるのだ」ということは一般的な公理であると述べられていた。

では第６の疑問についてはどうであろうか。一見すると、全称命題や条件命題などはその恰好の実例となるのではないのかという主張は、パース自身も指摘している。そのような「まったく認識できないものを指し示している記号」が存在する根拠は、以下のように説明されるだろう。たとえば、「すべてのXはYである」とした場合、あるいは「PならばQである」とした場合、いずれの場合であっても、それが唯一無二の存在でもない限りは、その条件には合致しないものの存在を完全には否定し尽くせていないということも起こり得るだろう。もしそうなのだとすると、そのような命題は、それが意味している現実の状態について述べているだけでなく、同時にその条件に合致しないすべての可能性に言及していることにもなる。そうなのだとするとそれは、私たちには知り得ない何物かについて述べていることになるのではないか、というのがそれである。しかしパースの考えは、記号というものの本質からしてそのような記号は存在しない、というものである。

私たちの持つ概念というものはすべて、抽象化と、ある経験の判断が最初に認識されたものの結合とから獲得される。したがって、まったく認識することができないような概念というものは存在しない。なぜなら、そのような概念が経験のうちに生起することはあり得ないからである。ある述語の意味とは、それが伝える概念でしかない。したがって、ある述語が私たちにまったく認識できないような意味を持つということもあり得ないのである。（all our conceptions are obtained by abstractions and combinations of cognitions first



occurring in judgments of experience. Accordingly, there can be no conception of the absolutely incognizable, since nothing of that sort occurs in experience. But the meaning of a term is the conception which it conveys. Hence, a term can have no such meaning.)<sup>(17)</sup>

これは、すでに第5の疑問を検討する際に、「認識できない思考は存在しない思考である。したがって、すべての思考は必然的に記号化された思考となる」ことの確認が済んでいる問題であろう。

以上、こうしてパースによる7つの疑問を検討してきた。その中で特にわれわれにとって重要な問題は、やはり「私たちには、記号によらない思考というものがあるだろうか」という第5の疑問である。パースは一貫して「記号 (sign)」という言葉を使っていたが、ひとたび言語を獲得した人間にとっての記号とは、つまりは言語の謂いではないのか。もちろん言語以外の記号も存在するから、記号は言語の上位概念であるとする考え方もある。しかし一方で、言語を運用する能力を持って生まれ、現にある言語を獲得するに至ってしまった人間にとっては、言語こそが記号であり、人間の使用する記号はすべて広義における言語であるから、言語こそが記号の上位概念であるとする考え方もあるようだ。いずれにせよ、ここではパースに依拠することで、「人間には言語によらない思考は不可能である」ことを確認することができた。

なぜわれわれがここで、そのような一見すると「人間コミュニケーション」という本筋からは迂回路とも思われるかもしれない問題を検討してきたのかということには、それなりの理由がある。それは、言語（コトバ）を獲得してしまった人間の内面、すなわち「私」という感覚と「自意識」とを形作っているのが、他ならぬ当のそのコトバだから、なのである。ややもすれば私たちはつい、「内言（思考）」はコミュニケーションに先行すると考えてしまいたくなる。しかし「私」という存在は、他者から「私」に話しかけられた「コトバ」を「私」が内面化（獲得）し、その「コトバ」によって「私」が自己に言及することが可能になること、それによって初めて成立可能なものなのである。そしてそれは、まず「私」というものがあって、その「私」が感じ、考えたものを伝達し合うのがコミュニケーションである、という日常的な感覚とは齟齬をきたすものではないのか。特にコミュニケーションの初学者にとって、それは受け入れがたい言明ではないのだろうか。しかし、これまで見てきたように、「私」が存在可能であるためには、それに先立つ他者とのコミュニケーションが必須なのである。この点を明らかにしておくことで、「なぜ私たちのコミュニケーションが時として（あるいは、しばしば？）成就しないことがあるのか」という日常的に繰り返される問いが、実は倒錯したものではないのかと疑う契機となるはずである。もちろんこのような問いは、ひとたび言語を獲得してしまった、つまりコミュニケーションの条件を具えていることが所与の前提となってしまった後には、私たちにとって切実な問題となることに変わりはない。それでも依然として、人間にとっては

コミュニケーションがまずあって、その後に初めて「私」というものが存在し得るのだということ、ミード（Mead, G. H.）の言葉を借りれば、「意味は個々人の間の関係の中にある。個々人の内部に封じ込められた心的なプロセスにあるのではない（significance belongs to things in their relations to individuals. It does not lie in mental process which are enclosed within individuals.）」<sup>(18)</sup> ということの重要性は、改めて強調しておく必要があるだろう。

それでは、人間の知的営為の出発点にあるのは常にコミュニケーションであるという点を確認し終えたところで、次節以降において人間のコミュニケーションの記号であるコトバ記号の特質についての検討を進めていくことにする。（以下、次号）

## 注

- （1）Pierce, C. S. (1968a) *Questions Concerning Certain Faculties Claimed for Man*. Journal of Speculative Philosophy, 2, pp103-114.
- （2）Pierce, C. S. (1968b) *Some Consequence of Four Incapacities*. Journal of Speculative Philosophy, 2, pp140-157.  
ただし本稿での引用、参照ソースは、すべてウェブサイト “Charles S. Peirce Studies” <http://www.peirce.org/> にリンクされた、<http://www.peirce.org/writings/p26.html> ならびに <http://www.peirce.org/p27.html> とした。そのため、原本の正確な引用箇所をあげられていないことを断っておく。また、訳文はすべて引用者による。
- （3）パースへの言及にあたっては、[米盛裕二『パースの記号学』勁草書房、1981] から教示を受ける点が大きかった。
- （4）*op cit.*
- （5）～（17）*ibid.*
- （18）Mead, G. H. (1922) *A Behavioristic Account of the Significant Symbol*. The Journal of Philosophy, 19, pp157-163.